九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

上古中国語における能格動詞の形態対立

劉，洪岩
九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻コミュニケーションデザイン科学コース

https://doi.org/10.15017/26448

出版情報：芸術工学研究. 18, pp.61-68, 2013-03-29. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン：
権利関係：

資料

受付日：2012 年 11 月 26 日、受理日：2013 年 1 月 21 日

上古中国語における能格動詞の形態対立

The Morphological Relativities of Ergative Verbs in Old Chinese

劉 洪岩 [1]
LIU Hongyan

Abstract

This report studies the morphological characteristics of ergative verbs in Old Chinese. Ergative verbs are morphologically relative in single-argument verb structure Npl+V and multi-argument verb sentence Np2+V+Np1. Three evidences can be found for the morphological relativity of ergative verbs: the relativity of suffix *–s and non-affixal morphemes, the relativity of suffix *–s and suffix *–ʔ, and the relativity of initial voiceless and voiced consonants. Besides, the combined use of affixes and voiceless consonants, suffix *–ʔ and non-affixal forms also contribute to the research of the question. Examinations are conducted on these morphological relativities based on audio materials of Old Chinese and morphological data of phonological dictionaries in Middle Chinese from historical comparative linguistics. Word examples from these materials are sorted out and summarized, based on which this paper addresses the possibility of exploring the historical morphological changes of ergative verbs. It is maintained that the above morphological characteristics can be regarded as the criteria for ergative verbs.

連絡先：劉 洪岩，liuhongyan0104@yahoo.co.jp
1 九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻コミュニケーションデザイン科学コース
Communication Design Science Course, Department of Design, Graduate School of Design, Kyushu University

0　はじめに

従来の能格（ergative）研究は項（argument）の格標識の形態を対象とするものが中心である。Dixon（1994），Comrie（1978）などの類型論の研究が代表的なものである。Perlmutter（1978）による，生成文法に基づく研究は自動詞を非能格動詞（unergative verbs）と非対格動詞（unaccusative verbs）に二分し，動詞の統語的な特徴の視点で能格研究の新領域を開いた。この説に基づいて，Halliday（1985）と影山（1996）などの説は，動詞の統語分析は他動詞分析と能格性分析を大別し，非対格動詞の概念に対して，能格動詞（ergative verbs）の概念 [1] を確立した。

呂（1978）は中国語の動詞を自他動詞対立の範疇と「自動詞」[2]・使動詞対立の範疇との 2 つの範疇に分けた。後者の分類は能格の特徴があると認めたが，中国語においては形態の変化がないので，中国語は能格動詞言語ではないと主張する。Liu（1994），徐（1998）はこの二つの動詞範疇について考察し，能格動詞である可能性を述べたが，同じく形態の変化の証拠がないため，明確に能格動詞説を提示できなかった。

中古以降の中国語においては形態変化があまりないというのがほぼ定説になった。

その一方，上古中国語において，豊富な形態的な変化がある。Yakhontov（1960），Pulleyblank（1973），Li（1983）と潘（1991）などは上古中国語の動詞形態について，一連の研究をした。その結果，形態変化は使役化（causativization）接辞や動詞の内的な項（internal argument）と外的な項（external argument）を区分すると

いう屈折変化などについての論議があるが，まだ定説がない問題点である。そして，これらの研究は，チベット・ミャンマー語（Tibeto-Berman Languages）との比較のデータを重視する一方，上古中国語の形態を標示する中古音韻辞書の資料に対する関心は低いので，研究資料についてまだ不完全だと考えられる。

本稿は比較研究の形態資料と中古の形態資料を利用し，上古中国語の能格動詞の形態変化資料を作成するためのものである。この資料に即して，上古中国語における能格動詞の形態変化の特徴を分析したい。

1　先行研究と問題点

1.1　認定基準の先行研究

上古中国語における能格動詞の研究は語彙論と統語的な分析は多いが，能格動詞と他種の動詞との関係，能格動詞の認定などに統一したものはない。以下にこれらの研究の能格動詞の認定基準を挙げよう。

Cikoski（1978）は古代中国語動詞を「中性動詞」と「能格動詞」に大別した。この区分の根拠は語彙の意味的な特徴であり，意味的な特徴によって，統語上の格の特性が違うと主張した。Harbsmeier（1980）はこの判断の基準について異議を提出した。意味的な特徴はゆらぎがあるので，いわゆる中性動詞[3]と能格動詞の間に明確な境界線がなく，動詞特性の傾向性の問題だと説明した。

Liu（1994）と易（1999）は動詞文の統語的な特徴によって，動詞の他動性の面で古代中国語の能格動詞を判定した。両者の判定基準は大きな差はないが，認定した動詞例の帰属範囲は異なる。纏めて言えば，前者は高他動詞，低他動詞，使動詞と能格動詞の分類を示したが，後者は他動詞，自動詞，直接動詞，能格動詞という分類を提唱した。

大西（2004）は Cikoski の分類に基づき，構文上の基準を確立した。つまり，上古中国語に，「X+V+Y」の二項動詞文における動詞は「Np＋V」の一項動詞文に出現する場合，主語の Np は Y に該当する比率が高い傾向があれば，動詞 V は能格動詞に認定すべきだと主張した。宋（2005）は構文頻度の説に対して，さらに解明した。「Y＋V」の構文に中性動詞と能格動詞が両方とも出現する可能性があるが，前者の場合は語用的な現象で，使用頻度が低い。それに対して，後者の場合は能格動詞の構文変化で，出現頻度が高いと解釈した。そして，この基準の他に，意味的な拡張，音韻的な分化を判断基準とされる可能性を提出した。

楊（2009）は上述の構文上の判断基準以外に，非対格動詞の検証方法に即して，構文上，二項動詞文に使役形式，一項動詞文に完成，受け身の形式と共通する特徴を能格動詞文の検証基準とした。楊の最も重要な貢献は，上古中国語の形態的な変化は能格動詞の特徴であることを明確にしたことである。

以上の先行研究の能格動詞の認定基準を見ると，上古中国語における能格動詞の範囲の確認，及び同一動詞が能格動詞に帰属するのかについて，だいぶ違う意見が見える。上述の研究の基準で，上古中国語の能格動詞の問題を体系化するのは不十分だと考えられる。以下に主な問題点を述べる。

1.2　問題点

先行研究の認定基準の問題点は，以下の三点，意味，統語，構文上の問題に纏められる。

意味においては，語義の判断基準に曖昧さがある。動詞の意味的な拡張があるので，意味的なゆらぎが生じ動詞の性質の判断に主観的な要素が強い。

統語に関しては，他動性を認定基準とするのは概念の混淆がある。なぜなら，自動詞・他動詞の範疇は「中性動詞」・能格動詞の範疇とは，違う角度からの動詞分類だと思われるからである。他動詞はもともと自他動詞の分類基準とされたので，この範疇の基準を使って「中性動詞」・能格動詞を認定するのは難しい。

構文上において，「Y＋V」のような受動者主語文は認定基準になり難い。上古中国語の動詞は語用的な用法で受動者主語文の臨時的な表現が少なくない。一部は元々の動詞の構文特徴ではなく，能格動詞文から類推（analogy）した変化中の現象だと考えられる。したがって，単なる比率の考察は認定基準になり得るのか検討すべき問題である。

以上の問題点によって，上古中国語における能格動詞の考察は上述した認定基準の他に，もっと客観的な分析要素が必要だと思う。前節にあげた Yakhontov（1960），Pulleyblank（1973）などの比較言語の考察と前述した宋（2005），楊（2009）の上古動詞の考察はすでに形態変化の面で上古中国語の能格動詞を検証する可能性と方向，及び考察方法を提示したが，まだ纏まった説はない。以下は能格動詞の認定基準と考えられる上古中国語の能格動詞の形態変化の調査資料を示してみたい。

2 上古中国語における能格動詞の形態変化

2.1 考察範囲と方法

本稿の動詞の考察範囲は２つの方法で確定した。一つは，先行研究に論及された研究対象の動詞を本研究の対象とする。他に，比較言語の考察に「自動詞」・使動詞と認定された対象を本研究の対象とする。合計 64 語がある。もう一つは，上古の常用語から考察対象を抽出する。ここで楊（2007）と李（2012）の上古語彙の量的な調査を参照し，前者考察に適用率（coverage rate）0.8 以下の動詞と後者考察に出現回数（number of times）10 以上の動詞を抽出し，上古の常用動詞として考察する。2 つの方法で確定した動詞は重複したものがあるが，合計 352 例ある。

音韻形態面の考察は四段階で行う。まず，中古の音韻辞書[4]を利用し，能格動詞の可能性がある動詞の中古形態を確認する。また，中古音によって，これらの動詞の再構された上古形態を考察する。それから，比較言語学に示されている上古音と対照し，上古形態の変化を確定する。最後に，先行研究における各判定基準で形態上に能格動詞の可能性がある動詞をもう一回検証する。

また，上古中国語の形態の再構について，学説と考察方法によってだいぶ違う再構音が出る可能性がある。いままでに，上古中国音韻形態の代表研究は主に８つの説があると思われる。「死」の上古音の再構を例として，表１のような差が見られる。諸説の間の区別は主に調音方法であり，形態の対立は相対的な音声対立なので，考察の結論に大きな影響はないと考える。論述便宜のため，本稿は主にわりに新しく，鄭重と潘の説を参照しよう。

表１　「死」の上古音の再構の諸説

諸説	再構された上古音
Karlgren	*si̯ær
Li	*sjidx
王	*siei
董	*sjed
Baxter	*sjijʔ
周	*sjier
鄭張	*hljiʔ
潘	*ph-ljiʔ

2.2 能格動詞の形態対立

2.2.1 接尾辞*-s と無接辞の形態対立

上古中国語における能格動詞の形態対立は最も多く見られるのは接尾辞*-s と無接辞の形態対立で，本稿の調査結果は計６１例がある。考察例を表２に列挙する。統語の特徴を見るため，ここに代表例の「傷」，「出」二例の例文[5]をあげる。

1）傷
l̥aŋ（式羊）
川　壅　　爾　潰，　傷　人　必　多。（國語-周語）
川　塞ぐ　連語　潰れる 傷　人　必ず　多い
川を塞いだら氾濫する。きっと大勢の国民が死傷する。
l̥aŋs（式亮）
子皙　傷　　爾　　歸。　（左傳-昭公）
子皙　傷　接続助詞　帰る
子皙は怪我して帰ってきた。
2）出
khljud（赤律）
季氏　出　　其　　君。（左傳-昭公）
季氏　出　代名詞　王様
季氏は王様に顔を出してもらった。
khljuds（尺類）
王　　出，　復　　語。（左傳-昭公）
王様　出　　再び　言う
王様が出て，再び言っていた。

これらの動詞は一項動詞としての形態は接尾辞*-s であり，対応する文型は「Np1+V」である。二項動詞としての形態は無接辞の形態で，対応する文型は「Np2+V+Np1」である。

2.2.2 清音と濁音の形態対立

上古の能格動詞のもう一つの重要な形態対立は前置子音の清音と濁音の対立であり，本稿の調査結果は計 16 例がある。そして，これらの用例は表記が多表記を利用する傾向がある。考察例を表 3 に列挙する。ここで代表例の「敗」と「盡」の例文をあげ，形態と統語特徴の関係を見よう。

3）敗
braads（薄邁）
吳　師　　大　　敗，吳　　師　　乃
呉　軍隊　程度副詞　敗　呉　軍隊　接続助詞
歸。　（左傳-定公）
帰る
呉の軍隊は散々に負けた。ついに国に帰ってきた。
praads（補邁）
惠公　之　季年，敗　宋　師　　於　　黄。（左傳-隱公元年）

恵公　の　三年　敗　宋　軍隊　場所格　黄河
恵公三年，黄河で宋の軍隊を打ち勝った。
4）盡
dzjinʔ（即忍）
楚　師　　遼遠，糧食　將　　盡。（左傳-襄公）
楚　軍隊　遠い　食糧　将来体　盡
楚軍は遠くまで侵入したから，食糧はなくなる見込みだ。
tsjinʔ（慈忍）
夫　　戰，　盡　敵　　為　　上。（國語-周語中）
係助詞　戦争　盡　敵　コピュラ　　上策
戦争には，最もよい対策が敵を覆い尽くすことだ。

表２　接尾辞*-s と無接辞の形態対立例

表記	中古訓１	二項形態	中古訓２	一項形態
傷	式羊	l̥aŋ	式亮	l̥aŋs
穿	昌縁	khljon	尺絹	khljons
殘	昨干	zlaan	徂贊	zaans
亡	武方	maŋ	武昂	maŋs
出	赤律	khljud	尺類	khljuds
沉湛瀋	直深	g-lum	直禁	g-lums
喪	息郎	smaaŋ	蘇浪	smaaŋs
降	下江	gruum	古巷	gruums
敝	便滅	bed	毗祭	beds
興	虚陵	qhɯŋ	許應	qhɯŋs
正	諸盈	tjeŋ	之盛	tjeŋs
齊	徂奚	ziil	在詣	ziils
圍	雨非	gul	于貴	guls
殺	所八	sreed	所拜	sreeds
居踞倨	九魚	ka	居御	kas
宿	息逐	sug	息救	sugs
易	羊益	leg	以豉	legs
號	胡刀	glaaw	胡到	glaaws
和	户戈	gool	胡臥	gools
回廻	户恢	guul	胡對	guuls
飲	於錦	qrum	於禁	qrums
賦	方魚	pa	方遇	pas
扼捻	於革	qreeg	烏懈	qreegs
惡	烏各	qaag	烏路	qaags
乞	去訖	khɯd	去既	khɯds
供	九容	kloŋ	居用	kloŋs
空	苦紅	khooŋ	苦貢	khooŋs
足	即玉	sog	子句	sogs
乘	食陵	cljɯŋ	實證	cljɯŋs
剩	七迹	skheg	七賜	skhegs
說	失爇	l̥d	舒芮	l̥ds
藏葬	昨郎	sgaaŋ	徂浪	sgaaŋs
伏	房六	bɯg	扶富	bɯgs
縫	符容	boŋ	扶用	boŋs
留	力求	[m]ru	力救	[m]rus
當	都郎	k-laaŋ	丁浪	k-laaŋs
陳	直珍	rliŋ	直刃	rliŋs
知智	陟離	k-le	知義	k-les
中	陟弓	tuŋ	陟仲	tuŋs
奔	博昆	pɯɯn	甫悶	pɯɯns
過	古禾	klool	古臥	klools
觀	古丸	koon	古玩	koons
貫	古丸	koon	古玩	koons
覺	古岳	kruug	古孝	kruugs
問聞	無分	mɯn	亡運	mɯns
貸貢	他德	l̥ɯɯg	他代	l̥ɯɯgs
狂誑	巨王	gʷaŋ	渠放	gʷaŋs
略賂	離灼	[g]rag	洛故	[g]raags
增	作滕	sɯɯŋ	子鄧	sɯɯŋs
污淤	哀都	qʷaa	烏路	qʷaas
燒	式招	ŋ̊hjew	失照	ŋ̊hjaws
應	於陵	qɯŋ	於證	qɯŋs
深	式針	qhljum	式禁	qhljums
逾輸	式朱	hljo	傷遇	hljos
施	式支	l̥al	施智	l̥als
盛	是征	djeŋ	承正	djeŋs
張	陟良	taŋ	知亮	taŋs
治	直吏	rlɯ	直利	rlis
作	則落	skaag	則箇	skaags
告	古沃	kuug	古到	kuugs
納内	奴答	nuub	奴對	nuubs

これらの動詞は一項動詞としての形態は前置子音が濁音であり，対応する文型は「Np1+V」である。二項動詞としての形態は前置子音が清音の形態で，対応する文型は「Np2+V+Np1」である。

2.2.3　接尾辞*-s と*-ʔ の対立

上古の能格動詞の形態対立に，接尾辞*-s は無接辞形態と対立する他に，接尾辞*-ʔ[6] との対立もよく見られる現

象である。本稿の調査結果は計２４例がある。考察例を表４列挙する。ここで代表例の「毀」と「去」の例文をあげ，形態と統語特徴の関係を見よう。

5）毀
m̥hal̚（許委）
司馬　毀　吳　舟　於　　淮。（左傳-定公）
司馬　毀　呉　船　場所格　淮川
司馬は淮川で呉の船を打ち壊した。
m̥hals（況僞）
有　　爭　　臣　　二人　　則　　宗廟　　不　毀。（韓非子-子道）
いる　忠実　大臣　二人　接続助詞　宗廟　否定　毀
忠実な大臣二人さえいれば，宗廟は崩壊しない。
6）去
kha̚（羌舉）
去　民　　所　　惡。（管子–牧民）
去　国民　名詞化標識　嫌がる
国民が嫌がることを取り除く。
khas（丘倨）
吾　　不　　去，懼　　及　　焉。（國語–晉語）
われ　否定　去　怖がる　極めて　終助詞
われは行かない。怖くてたまらないから。

これらの動詞は一項動詞としての形態は 2.2.1 と同じく接尾辞*–s であり，対応する文型は「Np1+V」である。前節と異なるのは，二項動詞としての形態は接尾辞*–̚の形態で，対応する文型は「Np2+V+Np1」である。

また，接尾辞*–̚の形態対立の対象は接尾辞*–s だけではなく，無接辞の場合もある。以下の表５に６例を考察した。金（2006）は動詞のこの形態対立を言及したが，能格動詞の形態変化の問題を触れていない。また，この６例は先行研究の判断基準で能格動詞だと認定された。本稿に接尾辞*–s と*–̚の対立として扱い，ここで例文を省く。

3　上古中国語における能格動詞の形態対立の説明

以上は上古の能格動詞の形態変化の対立例をあげたが，これについて考察資料の分析備考として何点の説明を加える。

3.1　異表記について

上文の考察に同じ形態のペアが異なる漢字の表記という現状をいくつか見られた。これは語の認定の問題だと思う。同じ形態で，意味の拡張関係がある漢字は上古中国語に一語だと認定できるのではないか。しかし，場合によってはこのような考察法は問題が出る。表６は先行研究に挙げられた例である。一見して形態の対立があって，そして語義になんらかの関連があるが，実際にまず同じ部首がある漢字はもともと同じような形態の可能性が高い。また，形態が似ているにもかかわらず，この形態の対立は単なる意味の拡張であろうか，それとももう一種の形態変化と言えるのかについて検討すべき問題だと思う。

表３　清音と濁音の形態対立例

表記	中古訓１	二項形態	中古訓２	一項形態
敗	補邁	praads	薄邁	braads
折	之涉	kljob	盧合	[g]ruub
盡	慈忍	tsjin̚	即忍	dzjin̚
誅殊	陟輸	to	市朱	djo
合	古沓	kuub	侯閤	guub
夾狹	古洽	kreeb	侯夾	greeb
均匀	居匀	kʷin	羊倫	gʷin
会	古外	koobs	黄外	goobs
住駐	中句	tos	持遇	dos
乾	古寒	kaan	渠焉	gran
見	古電	keens	胡甸	geens
別	方別	pred	皮列	bred
屬	之欲	tjog	市玉	djog
朝	陟遥	p-lew	直遥	b-lew
致至	陟利	tigs	直利	digs
辟避	芳辟	pheg	房益	beg

表４　接尾辞*–s と*–̚の対立例

表記	中古訓１	二項形態	中古訓２	一項形態
毀	許委	m̥hal	況僞	m̥hals
去	羌舉	kha̚	丘倨	khas
怒	奴古	naa̚	乃故	naas
苦	康杜	khaa̚	苦故	khaas
處	昌與	khlja̚	昌據	khljas
養	餘兩	laŋ̚	餘亮	laŋs
受授	殖酉	dju̚	承呪	djus
語	魚巨	ŋa̚	牛倨	ŋas
近	其謹	gun̚	巨斬	guns
仰	魚兩	ŋaŋ̚	魚向	ŋaŋs

買賣	莫蟹	mreeʔ	莫懈	mrees
坐	徂果	sgloolʔ	徂臥	sglools
累	力委	[g]rolʔ	良僞	[g]rols
重	直隴	doŋʔ	柱用	doŋs
視	承矢	gljilʔ	常利	gljils
走	子苟	sklooʔ	則候	skloos
舍	書冶	l̥aʔ	始夜	l̥as
吐	他魯	kh-laaʔ	湯故	kh-laas
轉	陟兖	tonʔ	知戀	tons
被	皮彼	balʔ	平義	bals
恐兇	丘隴	khoŋʔ	區用	khoŋs
預豫予	余呂	laʔ	羊洳	las
燎	力小	[g]rewʔ	力照	[g]rews
啖	徒敢	g-laamʔ	徒濫	g-laams
引	余忍	linʔ	羊晉	lins

表５　接尾辞*-ʔ と無接辞の対立例

表記	中古 訓１	二項 形態	中古 訓２	一項 形態
反	府遠	panʔ	孚袁	phan
罷	皮彼	brelʔ	符羈	brel
舉	居許	klaʔ	以諸	la
仕	鉏里	srɯʔ	鉏吏	zrɯ
舒	神與	ɕljaʔ	傷魚	l̥a
平	房連	beŋʔ	符兵	beŋ

表６　先行研究に異表記の形態対立例

表記１	形態１	表記２	形態２
猝	tjud	醉	tjuds
寫	skjaʔ	泻	skjas
到	tu	逃	du
清	thjiŋ	凈	djiŋs
違	ɕul	讳	qhuls

3.2　中古資料の限界性について

中国語の動詞の上古形態を再構するのは，中古の音韻辞書は不可欠の資料だと思われるが，本稿の考察から見れば，中古資料の限界性があると言わざるをえない。先行研究に認定された上古の能格動詞の一部が中古資料に形態の変化のデータがないので，一形態である。しかし，上古の例文を見れば能格動詞の可能性がある動詞が少なくない。これからの研究のため，本調査に出てきた形態の変化がないが，能格動詞だと考えられる動詞を表７に羅列する。同表に予想する形態の変化も記入したい。

表７　能格動詞の形態変化可能の動詞例

表記	既知 中古音	既知上 古形態	可能 対立形態
成	是征	djeŋ	tjeŋ
破	普過	phaals	phaal
裂	良薛	red	reds
滅	亡列	med	meds
絕	情雪	dzjiwat	tsjiwat
竭	渠列	grad	krad
存	徂尊	zuɯn	zuɯns
起	墟里	khɯʔ	khɯs
退	他内	n̥uubs	n̥uub
立	力入	[ɢ]rɯb	[ɢ]rɯbs
止	諸市	kljɯʔ	kljɯs
服	房六	bɯg	pɯg
動	徒揔	dooŋʔ	dooŋs
廢	方肺	pads	pad
明	武兵	mraŋ	mraŋ
安	烏寒	qaan	qaans
亂	郎段	[g]roons	[g]roon
弑	式吏	l̥ɯgs	l̥ɯg
黜	丑律	khlud	khluds
斬	側減	skreemʔ	skreems
忌	渠記	gɯ	kɯ
加	古牙	kraal	graal
善	常演	djenʔ	djens
驚	舉卿	kreŋ	greŋ
育	余六	lug	lugs
集	秦入	sgub	sgubs
息	相即	slɯg	slɯgs
落	盧各	[g]raag	[g]raags
怯	去劫	khab	khabs
遂	徐醉	ljuds	ljud
開	苦哀	khɯɯl	khɯɯls
失	式質	l̥ig	l̥igs

3.3　接頭辞の可能性について

潘（1991），梅（2008），金（2006）は上古中国語の動詞形態の対立について，使動詞の形態に対して，「自動詞」は接頭辞*s-で形態を標示する可能を述べて，さらに接頭辞*s-と動詞における前置子音の清濁音の対立の関係を説明した。そして，楊（1999）は非対格動詞の考察に接頭辞*s-で標示したのは対格動詞の二項動詞形態だと主張した。本稿の考察において，このような形態対立の用例はないが，金（2006）の例証を表８にまとめる。

語義から見れば，このような動詞は確かに能格動詞の性質があるが，単に先行研究の検証方法だけを利用して証明できない。そして，これは比較言語の方法で得た結論なので，中古資料の裏づけがない。龔（2001）の図１の変化傾向から見れば，この現象は上古中国語よりもっと早い現象だと思われるので，さらに検討する余地はあるが，本稿はこの問題の可能性だけをあげる。

表８　接頭辞*s-の形態対立例

表記	中古訓１	二項形態	中古訓２	一項形態
事	側吏	ʔsrɯ	鉏里	srɯ
卒	臧沒	ʔsuud	倉沒	shuud
脱	徒活	ʔ-lood	他括	l̥od
射	神夜	ʔljags	羊謝	lags
紓	神與	ʔljaʔ	傷魚	l̥a

図１　接頭辞*s-対立から清濁音対立への変化例

別　PC *ɦ-brjat>OC *brjat>MC bjat
　　PC *s-brjat>*s-prjat >OC *prjat>MC pjat
敗　PC *ɦ-brads>OC *brads>MC bwai
　　PC *s-brads>*s-prads>OC *prads>MC pwai

3.4　接尾辞形態と清濁音形態の関係ついて

考察に以上の三つの形態対立の現象の他に，同一の能格動詞は二種以上の形態の対立を併用する現象があることが明確になった。表９に示した１３例である。

能格動詞の統語の機能は２つに対立していたのに，なぜ多種の形態対立の手段が共存しているのか。そして，接尾辞形態と清濁音の形態はどのような関係があるのか。これについて，同じ能格動詞の形態変化ではあるが，動詞の特徴によって形態の対立が起きると考えらる。したがって，諸々の先行研究で能格動詞に関していろいろな分類を試みているが，本稿の形態考察の結果を見れば，類別が同じ動詞は形態対立が違い，類別が違う動詞は形態対立が同じであるという特徴を示す現象が多い。

本稿にあげた資料だけでは，まだこの問題を解明できないが，接尾辞形態と清濁形態対立の能格動詞の統語特徴は特に区別が見られないと予測する。むしろ，これは動詞類別の問題ではなく，歴史上の形態更新だと考えられる。前節に接頭辞と清濁音の関係から見れば，接頭辞*s-と接尾辞*s-は同じ機能の形態で，もともと同一形態の可能性がないわけではない。本稿の考察資料はおもに上古の先秦期の資料である。それ以前の形態対立の状況はまだ不明であるが，上述データの統計から見れば，図２のような歴史的な変化があると想定できる。

図２　能格形態対立の歴史変化

PC *s-　⇒ OD　清濁音　　⇒　MC *-s（*-ʔ）
　　併存　↕　　類推
　　⇒ OC　*-s（*-ʔ）

以上は，本稿にまとめた資料の説明である。分析には至らなかったが，今後の研究課題として記した。

４　おわりに

本稿は比較言語と中古音韻の資料を利用して上古中国語における能格動詞の形態変化について網羅的に考察を行い，資料集として整理した。上古の能格動詞は一項動詞「Np1+V」と二項動詞「Np2+V+Np1」を形態の対立によって区別する。構文変化の形は似ているが，臨時的な，語用的な動詞の活用はこのような形態上の対立はない。

考察の結果，上古の能格動詞の形態変化は三つの対立が見られる。つまり，接尾辞*-s と無接辞の対立，前置子音の清音と濁音の対立，接尾辞*-s と接尾辞*-ʔ の対立である。これらの能格動詞の形態変化の間に，動詞の特徴の区別はあまり見られないので，もともと同一のものだと考えられる。多形態併用，存在可能であった接頭辞*s-が清濁音と接尾辞*-s との対応関係などから見れば，これらの形態対立の関係は，歴史を超えて継続する関係だと考えられる。

上古中国語における能格動詞の認定について，統語構文及び頻度検証などの方法以外に，形態変化の対立は重要な基準として利用できることを確信する。さらに，この資料に基づき一連の歴史的な変化を究明できると考える。

表９　多形態併用の例

傳	知戀	tons	直攣	don
覆	敷救	phugs	扶富	bugs
斷	徒管	doonʔ	丁貫	toons
停	丁定	teeŋs	徒徑	deeŋs
從	七恭	shoŋ	疾用	zoŋs
識	職吏	kljɯgs	賞職	qhljɯg
漂飄	匹妙	phews	符霄	bew
借籍	子夜	skjaags	慈夜	sgjaags
離	郎計	[b]reels	丑知	ph-rel
句	其俱	go	古候	koos
繫	古詣	keegs	胡計	geegs
分	府文	pɯn	扶問	bɯns
生	所庚	skheeŋ	所敬	sqreŋs
長	知丈	k-laŋʔ	直良	g-laŋ
著	直略	g-la	陟慮	k-las
解	佳買	kreeʔ	胡懈	grees
順馴訓	詳遵	ɢlun	許運	qhuns

注釈

1）能格動詞の概念はよく非対格動詞と同じのものだと思われる。この点について学説によって観点が違う。本稿は影山（1996）の説を採用し，能格動詞は非対格動詞のような自動詞の下位範疇ではなく，動詞の一種の基本範疇とする。

2）中国語の使動詞研究に「自動詞」という概念があるが，これは他動詞の相対概念ではなく「自主動詞」という意味である。

3）中性動詞はCikoski（1978）と大西（2004）が使った用語であるが，具体的に定義されていなかった。能格動詞の相対概念として，従来非対格動詞とされる動詞と他動詞の一部の動詞を含めている。

4）中古の音韻辞書とは主に「釈文経典」,「広韻」,「群経音弁」を指す。これらの本は中古期の発音で上古の経典，特に先秦時期の資料の音韻形態を解釈する資料である。

5）本文の調査文献について，２点の説明をする。成立地域について，太田辰夫（1984）の「古典中国語文法」によると，先秦期の中国語は魯方言や宋方言などの代表的な方言が分けられた。これらの方言の間に「差異が大きいので，それぞれ別個のものというほうが安全」である（p191）。本研究にあげた例は主に魯方言の資料を採用した。この方言は先秦期に最も豊富な資料があると思われる。成立の時代について，本文の調査は主に王力（1964）の「古代漢語」の時代区分を参考した。つまり，上古の音韻形態特徴を考えれば，先秦期（～紀元前 206 年まで）の資料を考察した。本文の調査資料について，詳細は文末に記する。

6）接尾辞*-ʔ の再構について説によって違う。従来は*-G，龔（2001）などは*-N，金（2006）は*-ɦと再構する。本稿は潘（1991）などの再構を使う。

調査資料

『論語訳注』，楊伯峻編，中華書局 1980 年版；『孟子訳注』，楊伯峻編，中華書局 1960 年版；『韓非子集釈補』，陳奇猷編，中華書局 1962 年版；『春秋左伝注』，楊伯峻編，中華書局 1981 年版；『国語』，上海古籍出版社 1978 年『四部備要』本

参考文献

1）大西克也，「施受動詞芻議-『史記』中的中性動詞和作格動詞」，『意義与形式-古代漢語語法論文集』，Lincom Europa，2004.

2）呂叔湘，「論勝和敗」，『中国語文』，第一号，1987.

3）宋亚雲，「漢語作格動詞的歴史演変化和相関問題研究」，北京大学博士論文，2005.

4）易福成，「『孫子兵法』謂詞句法和句義研究」，北京大学博士論文，1999.

5）影山太郎，「動詞意味論」，くろしお出版，1996.

6）Cikoski,John. An outline sketch of sentence structures and word classes in classical Chinese,*Computational Analyses of Asian and African Languages* 8,1978.

7）Comrie,Bernard.Language Universal and Linguistic Typology.*Chicago University Press,*1981.

8）Dixon,R,M. Ergativity,*Cambridge University Press*,1994.

9）潘悟雲，「上古漢語使動詞的屈折形式」，『溫州大学学報』，1991 年２号，1991.

10）楊作玲，「上古漢語非賓格動詞研究」，南開大学博士論文，2009.

11）李銘娜，「『呂氏春秋』動詞研究」，吉林大学博士論文，2012.

12）楊世鉄，「先秦常用語研究」，安徽大学博士論文，2007.

13）梅祖麟，「上古漢語動詞濁清別義的来源」，『民族語文』，2008 年 3 号，2008.

14）金理新，「上古漢語形態研究」，黄山書社，2006.